

論文の和文要旨	
論文題目	ラオ語の声調の音声的・音韻的構造と歴史的变化
氏名	柳村 裕

本研究では、音声的、歴史的、および音韻的側面からラオ語の声調を考察する。音声的側面については、ラオ語の声調の音声実現において、より安定的に観察される特徴は何かを明らかにする。歴史的側面からは、ラオ語諸方言の声調体系を記述するための初期調査を行い、それらの方言間比較に基づいて、ラオ語の声調に生じたと推定される歴史的音変化がどのようなものかに関する仮説設定を試みる。そして、これらの議論の結果に基づき、ラオ語の声調の音韻構造について声調素性 (tonal feature) を用いた分析を行う。

第 1 章では、まず、ラオ語ビエンチャン方言の声調に関する先行研究を批判的に検討したうえで、その声調目録、各声調の音声的特徴、変異などの特徴について概観する。次に、他言語の声調の音韻的考察においてどのような問題が重要なものとして取り上げられてきたかを述べ、ラオ語の声調の音韻的考察において本研究で取り組むものとして設定した 2 つの問題について述べる。すなわち、曲線声調を水平声調の連続へと分析できるかどうかという問題と、声調を構成する声調素性はどのようなものかという問題である。そして、ラオ語の声調には、これらの問題を考察するうえで重要な根拠となる声調の交替や分布の制限などの音韻的現象が観察されないため、従来の声調の音韻的考察において用いられてきたアプローチがラオ語の声調には適用できないことを指摘する。こうした問題を踏まえ、本研究では、従来のアプローチに代わる 2 通りのアプローチを採用する。すなわち音声的側面からのアプローチと歴史的側面からのアプローチである。音声的側面からのアプローチとは、異なる音声的条件の間で安定して観察される音声特徴が、音韻的に表示された特徴を反映したものであるという仮定のもとで、声調の音声実現パターンに基づいてその音韻的内部構造を検討するというものである。歴史的側面からのアプローチとは、声調の歴史的音変化をその音韻構造の変化として解釈し、それを簡潔あるいは透明に記述するには、どのような音韻構造を想定するのが有効であるかを検討することである。

第 2 章では、まず、ラオ語ビエンチャン方言の曲線声調が持つ音声的特徴のうちでより

安定して実現される特徴は何かを明らかにするための計測を行う。そして、これに関わる問題として、ラオ語の曲線声調が水平声調の連続から構成されるという解釈が可能かどうかという問題を中心に音韻的考察を行う。計測は、発話速度を操作することによって音節持続時間を変動させた条件下で、ラオ語の曲線声調を特徴付ける音響的変数の変動を観察するというものである。

計測の結果は以下の通りである。曲線声調の F0 変化の始端は、発話速度および音節持続時間が変動する条件下で、分節音列上の特定点（音節始端、母音始端、音節終端）からの時間的距離は変動するものの、音節持続時間に対しほぼ一定の割合で配置された。F0 変化の終端は、発話速度および音節持続時間の変動に関わらず、音節終端からほぼ一定の時間的距離に配置された。F0 変化時間は、発話速度の低下および音節持続時間の伸張に伴って規則的に伸張した。F0 変化の傾きは、まず、一部の声調については発話速度および音節持続時間によらずほぼ一定であった。他の声調については F0 変化の傾きに変動が観察されたが、話者間および声調間で共通の規則的パターンは認められなかった。F0 変化の幅は、発話速度の低下および音節持続時間の伸張に伴い規則的に拡大したが、F0 変化の傾きが変動する声調の中には、F0 変化の幅がほぼ一定に保たれているものもあった。以上の結果は、ラオ語の曲線声調の音声実現において比較的安定して観察されるといえる特徴は、F0 変化の両端の時間的配置と、F0 変化の傾きであることを示すものである。

以上の結果に基づき、ラオ語の曲線声調において、曲線声調は水平声調の連続で構成されるとする「水平観 (level view)」と、曲線が単一の要素であるとする「形状観 (configuration view)」のどちらがより妥当であるかを議論する。そして、得られた計測の結果は、一部ではこれらの見解の両方を支持し、また一部では形状観のみを支持するという解釈を提案する。まず、水平観と形状観の両方を支持する解釈とは以下のようなものである。水平観解釈については、曲線声調の F0 変化の両端の時間的配置がほぼ一定であることが、この見解を支持する根拠となると解釈できる。また、F0 変化の傾きがほぼ一定であることが、形状観解釈を支持する根拠になると解釈できる。以上の議論から、音声実現においてより安定して観察される特徴が音韻表示を反映した特徴であるという前提のもとでは、ラオ語の曲線声調は、F0 変化の両端の時間的配置に関わる特徴と、F0 変化の傾きに関わる特徴の両方が音韻的に指定されているという解釈を提案する。言い換えると、ラオ語の曲線声調はそれ自体が最小の構造的単位ではなく、F0 変化の両端の配置および F0 変化の傾きを指定する、より小さな単位へと分析できるという解釈を提案する。

一方で、得られた計測の結果は、形状観に基づいた解釈の一部である「声調素解釈」が妥当である可能性を示唆するものでもあった。声調素解釈とは、曲線声調はそれ自体が最小の単位であり、水平声調や曲線形状に関する特徴などのより小さな単位へと分析することはできないとする解釈である。声調素解釈を支持する根拠になり得る事実として指摘したのは、比較的安定して実現されるといえる音声特徴であっても、不規則な、あるいはわずかなではあるが規則的な変動を示すという事実である。これらの事実は、ラオ語の声調は

特定の音声特徴のみが常に安定して実現されるわけではないことを示すものであり、これが声調素解釈を支持する根拠となる可能性を指摘する。

第3章では、ラオ語の声調に生じた歴史的変化を探るためのパイロットスタディーを行う。この調査は、現時点で入手可能であった十分とはいえない資料に基づいた限界のあるものである。しかしながら、この調査で設定されたラオ語の声調の歴史的変化に関する仮説は、第4章で行う音韻的考察において重要な手掛かりとなるものである。また、そこで提示したラオ語の方言声調体系の初期的記述および仮説設定は、今後のラオ語の記述研究および歴史的研究を発展させるための準備となる価値のあるものである。

まず、ラオ語が所属するタイ系言語における声調の歴史的発展についての概観と、Blevins (2004) の提案する歴史的音変化の理論を援用した声調の音変化のメカニズムの検討を通して、本研究で行う声調の歴史的考察の概要を示す。次に、ラオ語の11方言変種の声調体系の記述するための初期調査の結果を提示する。ここでは、タイ祖語において再建される5つの声調カテゴリーと、その後の声調分岐に関わった4つの頭子音クラスを網羅的に組み合わせることができる20種類の語彙クラスのそれぞれについて、各方言が持つ声調の音形を記述する。これにより、方言間で共通の起源を持つ声調を特定し、それが現代諸方言においてどのような音形へと変化しているかを明らかにする。

続いて、これらの方言の間で対応する声調の音形を比較し、そこに生じたと推定される音変化の仮説を設定するための議論を行う。この議論は、比較対象とする方言のサンプリングに問題があり、それらの組織的調査も不十分であったため、ラオ語の声調に生じた歴史的変化を十分な妥当性を持って特定するものではない。しかしながら、このような限界を認識したうえで、ラオ語の声調に生じた可能性があるといえる歴史的音変化がどのようなものか、そして、それらの変化がどのような音声的源から生じたものかに関する仮説を提案する。提案された仮説の中で、ラオ語の声調の音韻的考察との関わりにおいて最も重要なものは、レジスターの変化、すなわち曲線声調がその形状を変えずに全体の高さのみを変化させるという過程である。

第4章では、そこまでの議論の結果に基づき、声調素性を用いたラオ語の声調の音韻的考察を行う。まず、声調の音韻的考察に関する先行研究において、どのような素性体系が用いられ、どのような表示方法が提案されてきたかを概観する。そして、それらの枠組みをラオ語の声調に適用することで、第2章で観察した安定的音声特徴に関する事実、および第3章で設定された歴史的変化の仮説に関して、妥当な形での記述が可能かどうかを検討する。

まず、声調素性を用いた高さの区別に関して、ラオ語の声調の対立関係を捉えたうえで、音声的特徴できるだけ忠実に音韻表示に反映させるには、4段階の高さの区別が必要であることを示す。次に、4段階の高さを区別できる声調素性として、話者の声域を大きく2分割する「レジスター素性」の導入について検討する。ここでは、レジスター素性を導入することによって、第3章でラオ語の声調の歴史において生じた変化の仮説として設定された

レジスターの変化をより透明に表現することができ、したがってこの素性がラオ語の声調の記述において有効であるといえることを示す。一方で、ラオ語の声調の記述にレジスター素性を導入することによって生じる問題点についても指摘し、それらはレジスター素性を用いた従来の枠組みを改訂することによってある程度の解決は可能であること、そしてこのことが、従来の枠組みの改訂の必要性を示唆するものであることを示す。

次に、ラオ語の曲線声調をどのように表示すべきかについて、第 2 章で観察された安定的音声特徴に関する事実に基づいて、以下の解釈を提案する。まず、ラオ語の曲線声調は 2 つの水平声調の連続で構成されると解釈する。また、声調の素性内部構造において、声調を支配する“tonal node”を導入する。さらに、曲線声調を構成する 2 つの水平声調の両方が、単一の tonal node によって支配されるという素性構造を想定する。以上の表示方法は、曲線声調が、水平声調の連続であると同時にそれ自体で単一の構造体をなすことを表現するものである。このような表示を想定することによって、第 2 章で観察されたラオ語の曲線声調に関する音声的事実を容易に説明可能であることを示す。まず、曲線声調における F0 変化の両端の時間的配置がほぼ一定であるという事実は、曲線声調が 2 つの水平声調の連続で構成され、それらの音声実現である F0 変化の両端の時間的配置が指定されていると解釈することで説明できる。また、曲線声調の F0 変化の傾きがほぼ一定であるという事実は、tonal node によって曲線声調が単一の構造体を形成し、これによって曲線声調の形状に関する特徴、すなわち F0 変化の傾きが指定されると解釈すると説明が可能である。

以上の議論から、ラオ語の声調の音韻構造の考察では声調素性による分析が有効であり、特に、レジスター素性を用いた 4 段階の高さの区別と、曲線声調の構造体を形成する tonal node の導入が有効であると結論する。

第 5 章では、本稿で行った議論を要約し、ラオ語の声調の研究と関連して将来取り組むべき課題について述べる。